

## レファレンス コーナー 「資源問題」を知ろう

荻野洋司

世界では資源争奪戦が始まった、とか、日本の食卓からマグロが消える、などの資源に関するニュースが流れている。ここで言う資源とは、経済活動で利用する原材料やエネルギー源を指す。世界におけるこの資源の動向を知っておくことは、これらの報道をより良く理解することにつながる。

ここではこの資源問題を扱った最近の文献を紹介する。

まず、各種資源の概略を誰でも短時間で理解できるのが、資源問題研究会著『図解世界資源マップ』（ダイヤモンド社 二〇〇八年八月）と永濱利廣・鈴木将之共編『図解資源の世界地図』（青春出版社 青春新書 二〇〇八年二月）である。

書名がよく似ている両書は、構成単位も一資源一項目で同じ。項目の記述でも解説が半分、残り半分がカラーの図表と数値が附された地図という構成で似ている。違いは前書は一項目が見開き二頁か四頁、版はB5判で大きく一目で要点がつかめるように編集がされているが、後書は新書版で一項目四頁という点である。

取り上げられている資源であるが、共通するのは、石油、天然ガス、石炭、鉄鉱石、銅、水、米、小麦、食肉、マグロなどの十数項目。さらに前書の特徴は、日本や中国など九カ国の各国資源戦略編とメタル別に三編計一九項目の鉱物資源編（後書は七項目）それにコラムにある。他方後書は、水産資源の章にタコやアサリなど七項目（前書は三項目）、環境資源の章に古紙や排出権ビジネスなど七項目（前書は無）、それに新エネルギーの章のバイオエタノールなど四項目（前書は無）にある。両書は共通する項目でも記述内容は補完関係にあり、引用の統計数値は最新でも二〇〇七年で少し古い、手軽に参照するハンドブックである。

ところで、エネルギーや鉱物資源の市場価格は、二〇〇八年半ばに史上最高値を付け、その後も過去と比較し高レベルに留まっている。資源市場の状況が様変わりしたのである。この市場では何が起きているのか、各国の対応はどうか、世界は資源をめぐる危機的な状況にあるのか、などの疑問に対し分析し答えているのが、柴田明夫・丸紅経済研究所編『資源を読む』（日本経済新聞出版社 日経文庫 二〇〇九年九月）である。第一章が資源が今注目される理由、第二章は資源を取り巻く環境（量の面と価格面）、第三章資源をめぐる動き、四章日本への影響と対応、五章価格の今後の展望という構成。この状況から見えてくるのは、現在

は二〇世紀型の枯渇性資源に立脚する成長モデルが限界となり、新たな低炭素社会構築による持続可能な成長への移行期の始まりという。情報密度が濃いビジネス書で、多少難解ではあるが一読に値する。

さて、資源争奪戦で、日本にとって無視できないのが中国の動向である。金属資源確保を国家戦略とする中国の世界への進出状況を知るには、四〇年各地で資源開発に従事した鉱山技師で資源・環境ジャーナリストの谷口正次著『メタル・ウォーズ：中国が世界の鉱物資源を支配する』（東洋経済新報社 二〇〇八年二月）と同著『メタル・ストラテジー：茫然自失の世界で猛烈支配を進める中国』（同 二〇〇九年六月）がある。

前書は日経BP・BizTech図書賞受賞作、本文の約半分を占める第一章「困り込みに狂奔する中国」で、消費国主導の新たな資源ナショナリズムに邁進する中国の様子を記述するほか、資源メジャーや金属資源開発の闇などを解説する。中国の資源外交は、武田信玄の旗印「風林火山」の「風と火」で、日本は「林と山」であると分析し、その日本の資源戦略はどうすべきかを、後書ではより具体的にそして詳細に論じている（統編にあたる後書には中国のみの章はない）。

つぎは、問題となっている石油の埋蔵量に関する図書。この石油の起源、資源量の評価、供給面での可能性に焦点をあて、需要面には触れず

技術的観点から論じているのが、石油天然ガス・金属鉱物資源機構調査部編『石油資源の行方：石油資源はあとどれくらいあるのか』（コロナ社 二〇〇九年四月）である。当書の特徴は、ピーク・オイルという石油枯渇論を評価した章と本文の半分以上を占める三つの章で、発見済みで開発待ちの油田、新規発見の油田、大規模可採埋蔵量の発見が確実視されている地域、技術開発待ちのオイルサンドなどの非在来型石油資源地域に関し、中東、北極海、シベリア、メキシコ、ブラジルなどの事例を油田地帯の地図と共に詳しく解説していることにある。専門書で技術用語や数式もあるが、それに囚われず読み進めば良い。興味深く門外漢にも石油資源の実状が把握できる。

最後に紹介するのは、京大名誉教授で環境倫理学者・加藤密武著『資源フライング：だがその持続可能性を維持するのか？』（丸善 二〇〇八年六月）。国家レベルではなく、地球規模での資源管理のための展望を示そうと、資源に関する多様な観点からの資料を集約したもので、二〇〇七年に雑誌『生活と環境』（日本環境衛生センター）に掲載した記事が中心。思索的な堅い文章で読みやすくないが、文中では引用した文献の出典が明記され、巻末には文献紹介もあり、資源問題を掘り下げて考えてゆく上で役立つ。

（おぎの ようじ／アジア経済研究所図書館）